

# 骨折

赤谷慶子

半世紀以上前、パスポート用の寫眞撮らんとて寫眞館へ赴く途上、當時未だ石ころと泥の道路にて轉倒し、右ひぢを複雑骨折したりき。脱臼せりと繰り返す<sup>こころもと</sup>爰許に大人ども笑ひて整骨院へ伴ひけるが、<sup>あにはか</sup>豈圖らん、骨折なりと診斷せられ、急遽病院へ搬送せられたり。當時新宿に所在したりし「國鐵病院」にて手術を受けギブスをはめらるる身とはなりにけり。數週間後ギブス解かれぬまま、父の赴任地なるパリへ母、妹ともに機上の人となる。そのころ航空機は全てプロペラ機なればパリまで三日を要す。未だ幼き姉妹は、給油するたびに航空機より降ろされ、晝も夜もあるものかは。マニフにては椰子の葉爽やかなる風に揺らるるの音、ボンベイにてはカレーの香り漂ふ等の斷片的なる記憶残れるのみ。パリ到着後暫くしてギブス外さるるを得、九十度に固められたる肘の、痛み伴ふ腕伸ばすマッサージ始まりたり。幼少のをり、左利きなりしを右利きに矯正すべく強<sup>し</sup>ひられたれば、右手使ふを得ずとてさほどの障碍はなかりき。

筋トレに氣功に、日ごろより鍛錬したりしかば、體力には自信あり、大腿にて早く歩むを常としたれども、ペディキュアをせし後なれば、足裁きの悪しきサンダル履きて、六本木通りにて勢ひ餘りて倒れたり。痛み尋常ならねば、白金台に居住したりし頃時々風邪等にて通院せし北里研究所病院に片手運轉にて駆け込みたり。診察の受附は終了したれど、昔合氣道にて右肩脱臼せし時救急搬送せられたるカルテもあり、若き醫師診察す。レントゲンにて見るに骨折するなし。内出血をしたりしかば、關節内骨折やも知れぬとの判斷なれど、金曜日にて既にCT検査はできず、再度月曜日に来院せよとの指示なりき。簡易ギブスはめられ大いに不自由なれど、愛車を放置せんも論外、心配して駆け附けたる友人を送り、片手運轉にて歸宅したりき。痛みはさほどなけれど、左手も指も紫色に變色するあり。翌日の氣功教室には参加し、仲間たちに「氣」を入れらるるを得たり。電流通したれば、血流良くなり骨のくつつくも早まる。月曜日のCT検査にて橈骨關節内に六ミリの龜裂發見せられたり。手術は避け、固定せられたるまま骨附くを待つ事に。全治二カ月との診斷なりき。タオルや雑巾絞る事、調理等もする能はず、何ともストレスのかかる二週間なりき。二十五日に本ギブスに替はり、不自由なる思ひ、若干は減少せり。内出血は解消し、筋トレも下半身を中心に再開したりき。残念ながら大好きなるゴルフは當分お預けなり。

天皇陛下在位三十年記念式典や東日本大震災政府追悼式典のご挨拶の英譯作業を終へたる後なれば、幸運なりきと言はずば勿體なし。しかうして年齢を顧みず、ストライドの大きな早歩みは大いに反省すべしと考ふるに至りき。

(平成三十一年三月三十一日受附)